

科学的エビデンスに基づく「スポーツの価値」の普及の在り方に関する委員会  
(第24期・第13回) 議事要旨

1 日時 令和2年8月28日(金) 16:00～18:00

2 場所 日本学術会議 6-A(1) 会議室

3 出席者： 渡辺 美代子(委員長)、山口香(副委員長)、高瀬 堅吉(幹事)、  
田原 淳子(幹事・記)、遠藤 謙、神尾 陽子、川上 泰雄、喜連川 優、  
田嶋 幸三、山極 壽一、來田 享子  
(欠席) 井野瀬 久美恵、萩田 紀博、酒折 文武、福林 徹、美濃 導彦  
(事務局) 實川 雅貴

4. 議事要旨

(1) 6/18の学術フォーラムの報告

資料1-1～6に基づき、委員長から報告がなされ、委員から感想が述べられた。要旨は以下の通り。

- ・参加者数は660名以上にのぼり、アンケート結果から参加者の傾向は人文社会科学系、40歳代、高齢者が比較的多かった。所属学会からの情報で参加した人が多く、居住地・勤務地とも首都圏以外が多かった。内容についての満足度も高かった。
- ・スポーツ庁長官への回答手交式に関するメディアの掲載について報告がなされた。
- ・オンラインに不慣れであったため、改善すべきである。特に日本学術会議における集音装置など会議も含めたオンライン開催の課題が見られ、早急な改善が必要である。
- ・オリンピックに多くの人に関心をもってきていることがわかった。スポーツの本質をもっと掘り下げていかなければいけないと思った。

(2) 今期の課題と来期への申し送りについて

委員長から資料2-1、2-2に基づき、スポーツ庁への回答と提言の概要について改めて説明がなされた。また、今期の委員会の課題を明確にすると共に来期にもスポーツに関する委員会の設置を要望することを申し送り事項とすることが述べられた。

これを受けて意見交換がなされた。要旨は以下の通り。

① スポーツの捉えられ方

- ・個人の健康に関するスポーツの効用については認識されているが、競技スポーツと生涯スポーツが別のもので捉えられ、分断されている。
- ・現在のスポーツの価値がプロフェッショナル志向で中間がない。本来、スポーツの価値

は勝った、負けたでわかりやすいがそんな単純なことではよくない。シングルメトリクスに落とすことの限界がある。

- ・スポーツの社会貢献を評価する指標がない、シングルメトリクスに依存していて、そこから脱却できない。

- ・価値を一元化する文化になっている（勝ち負け）。この価値を意図的に崩していくには、人間しかやらないこと、お金で換算できないことなど複数の指標を様々な分野から持ち込むことが必要。

- ・社会の中でスポーツは、スポーツイベントとして受け止められてきた。ビジネスとして成立しているかどうか、成立しないとテレビでも報じられない。スポーツイベントの価値は、多くの人が集まることで成り立っていた、人々の関心はパフォーマンスの高さに集まってきた。これを見直す必要がある。

## ② コロナ禍で見えたこと

- ・コロナ禍にあって子供たちの身体活動が極端に低下している。

- ・今期の議論で足りなかったのは、コロナ禍で日常的な集団スポーツができなくなっていることだ。これを真剣に考えないとスポーツの効用が萎んでしまう。ぜひ来期に引き継いでほしい。

- ・コロナ禍で、日本の社会は音楽・芸術やそれらを支える人々にお金を投じていかない。儲からなくても大切なものはスポーツにも同様にある。

- ・コロナ対応で大分動きや物の見方が変わってきているのではないか。絶対値を捨てる、金メダル、銀メダルという競争はやめて、実際値だけを残すなど新しい記録の出し方があるはずである。どういうメトリクスを持ってくるか考える時期に来ている。

- ・価値を何で測るのか、スポーツ界は、契約金、勝敗などに右往左往してきた。コロナによって、改めて大切なことを知る機会になった。

- ・コロナ禍で、甲子園ができなくなったが、それだけを特別扱いしている。プロスポーツにつながっているからだ。スポーツビジネスが若者のスポーツへの気持ちを高めている。だが、仲間意識を高めることなども大切なこと、敵味方に分かれて戦った者同士が生涯の友になることもある。スポーツビジネス以外の価値をきちんと評価をし、つながりを作っていく道を開いていくことが大切だ。

## ③ 学校体育

- ・児童、青年のことを考えると、身体運動としての体育はスポーツとは異なるため、あまり踏み込んで議論していなかった。学校が閉鎖的になっている。学校に依存するだけでなく、地域の中での経験やコミュニティでの体育経験も必要な時代になっている。

- ・心身は裏表だと言われている。身体的アクティビティはすごく注目されている、子供も大人も、体から入る方が得意な人もいる、体を通した経験は重要で、楽しくなることが大

事。

#### ④ 部活動

・中学・高校の部活動では、競技力が一義的にある。トップスポーツの価値が先行しているのではないか。欧米はクラブスポーツが盛んで民間で行っているが、日本では学校に依存してきたので、すぐには地域に移行できない。部活動は教員の負担が大きく、外部指導者の活用もされているが、本質的には手当てし切れていない。

・暴力、コーチングと部活動は親和性が高い。学校の先生が同時にコーチであり、生徒は指導者を選べない。指導者もわかっているので、多少理不尽なことがあってもそのまま行ってしまう。急激には変えられないが、限界が来ているので、どう未来志向で行うのかだ。

・部活動は悪者になりがちだが、素晴らしい指導者もいる。いいものもあるので、忘れずに伝えていかなければならない。良い面と改善すべき面を冷静に把握して考えていくべき。

#### ⑤ アスリート

・トップの人たちが目指される存在になるから、スポーツを目指す人々がいると思ってきた。憧れ、強くなる、上手になる、一番になる。上を目指すことは素晴らしいことだという価値観を刷り込まれてきた。金メダルとそうでない人の扱われ方の違いがあり、だから勝たないといけないんだ、と思ってきた。だが、限界にきているというのはわかる。トップアスリートは多様な価値を受け入れにくいのではないか。

・スポーツの力を提唱したネルソン・マンデラの行動は立派だが、アメリカの人はそういう意識を持っていない。国としてスポーツをしている気持ちはなく、自分の能力を世界に示そうとしている。政治的なことを示すことには抵抗感があると思う。

#### ⑥ スポーツのあり方・本質と役割

・大坂なおみさんが黒人差別に抗議して試合をボイコットした。黒人がスターを生み出しでも差別を乗り越えられない現実がある。スポーツの地位が低いのか。

・アメリカでスポーツで活躍しているのは、黒人の中でも一部の人。彼らをロールモデルと思えない黒人の人たちがいる。自分は有色人種の側にいるというアピールだと思う。日本では彼女の行動に賛同とバッシングの両方がみられた。日本では、スポーツ選手がエンタメと見られている。彼らの発言が政治とは無関係だと思われている。夢を壊されたと思っているのではないか。

・オリンピックは象徴的だが個人の活躍が国の発揚になっている。アメリカのアスリートはそうではないと考える人が多いと思う。個人のパーソナルな活躍であると考えている。政治的な場であるなら、そこで政治的アピールをしようとするのは当然だ。

・アメリカの人種問題は、あまりに根深く超えられない現実がある。正義だけでは語れないが、スポーツが一步でも貢献できたら素晴らしい。

・ハワード・ガードナーの『認知革命』では、スポーツの知能と科学的知能などを分けて、学术界で非難された。知能を分けることは正しくないが、超一流の心理学者が根拠のない仮説を作った。見ることで、運動分野の脳が動くことが証明された。想像するだけで共感し、脳が活動する。理性的作業と体を動かすことは別だと考えられていたが、脳の中では近い。アスリートが政治活動をするのは、矛盾のない行動だ。

・画一的でない多様な、包摂するスポーツが望まれる。スポーツがいいと言っても実際にどれほどできているのか。

・都会では道の修復は行政でやるが、田舎では住民が行なっている。都会でみんなで一緒にやれることはスポーツだ。スポーツを通じて人々の絆が深められる。過疎になって人々が集まる機会がなく、孤立していきがちだ。スポーツを利用して絆を作ることが求められている。

・AI がするスポーツと人間がするスポーツの話があったが、人間が人間らしくある中でスポーツをすることに意味がある（人間らしさを追求するスポーツ）。

・SDGs、ジェンダー、LGBTなどは、パラスポーツと相性が良かった。パラスポーツを研究することはただスポーツを盛り上げるのではなく、障害を持った人や環境のことを考えることになる。これまで通りのオリ・パラの形は難しいのではないか。同じような経済効果は見込めないと思う。これからどうやって価値あるものにするかが議論になると思う。東京オリ・パラがなくなってもこれまで取り組んできたことがレガシーになるものにしなければいけない。

・障害者スポーツから学ぶことが多かった。経済的価値だけで測れない価値がある、パラスポーツはそれがわかりやすく出てくる。新しい形を見出していくことが求められている。

## ⑦ 研究

・指導が成果につながったかどうかをみるには、長期的な研究が必要。教育の中に取り込むための研究が議論されるといいのではないか。

・過度な競技志向やタレント発掘が技術開発とも相まって、人権の軽視や人間の選別につながっているのではないか。倫理に関する配慮と研究が一層求められる。

・人権を無視したやり方では勝てないと思う。人権を無視する研究や、エリートだけが育てばいいということでは、競技力は上がっていかない。

・心理面の影響が非常に大きい。スポーツに関わる心理面の研究が十分進んでいない。

・スポーツはスポーツの世界だけで完結せず、社会の多様な側面との関わりの中で存在する。例えば、身体を動かしたくなるような街づくりが求められている。その意味でも学際的な研究と多分野との連携が推進される必要がある。

・スポーツの定義が曖昧だった。「みんなでスポーツしましょう」と言った時のスポーツ。

e-スポーツ、将棋は？高齢者の身体活動、スポーツの定義を明確にしたほうがよかった、

・スポーツは国民運動と言える。普通のスポーツで考えると、スポーツ・イングランド(SE)

はお手本だと思う。SE はレビューが数百本ある。仮説に基づいてアウトカムをとって、データになる。スポーツ庁も科学的な指標やいいだろうと思うものをエビデンスにとっておくといい。短くて役に立つデータを取ることをしていない。

#### ⑧ 政策課題（科学と社会）

・スポーツ心理学の知見の蓄積はあるが、それが現場に届いていないところに問題がある。サイレンスマジョリティにどう知見を届けるのかが課題。世代交代がキーワードで、世代が変わる前にスピードを早める必要がある。

・スポーツを社会に浸透させるにはファシリテーターが重要だ。スポーツは就職に結びつく。最近企業もクリエイティビティなどを重視するようになってきている。スポーツの中で何を学んでほしいのか、社会はスポーツに何を期待するのかを真剣に考えることが重要ではないか。

・スポーツには、子供から高齢者までの視点が必要。チーム、ルール、明確な目標設定など競技スポーツの長所を一般化することができる。

・「ロコモチャレンジ」の取り組みなどにより、高齢者における筋力刺激の効果が確認されている。

・スポーツのいい指導者を称えるようなプロモーションを進めていくことが根源的に重要。ほぼ全ての分野に共通すること。ただ 100m 走るのが速いということではなく、エビデンスベースの様々なメトリクスができるのではないか。

・オリンピックを日本で開催する意義は間違いなくあると思っている。本質的なスポーツの重要性を伝えていく必要がある。

・芸術でも鑑賞の仕方を教わっていない、スポーツも同じで見方を教わっていない、そういうところを補うような価値観を入れていけばいいのではないか。一般の人たちがスポーツに親しむフランスで柔道に人気があるのは、できないけど力学を含めた科学的な理解があって、楽しめる、高齢でも始める人がいる、そういうことを学際的なところで取り組めるといいのではないか。

・スポーツ庁が文科省の中にあるということは、学術の中にスポーツが入ってるということだ。

#### ⑨ 日本学術会議の役割と課題

・スポーツに関して学際的に議論し、取り組むことができる日本学術会議が果たすべき役割は大きい。

・今のスポーツは、モニタリング機能が弱い。目の前の近未来しか見ない。今期は十分議論できなかったなので、引き継いでほしい。

・スポーツをすることが日常的にならないか。そのためのエビデンスが不足している。

・政策に反映するためにもスポーツ庁との連携を継続してほしい。今期は学際的で、年齢、

ジェンダーが多様な委員が取り組んだのがよかったため、来期も継続してほしい。

以上